

公共の場における規範逸脱行動に対する 中学生の態度と逸脱頻度の関連 —「周囲にいる他者」の態度に着目して—

出口拓彦 (奈良教育大学)

キーワード：規範逸脱行動，学級，中学生

問 題

本研究は，教室や学校等，公共の場における中学生の規範逸脱行動について，「周囲にいる他者」の影響に着目して検討した。

方 法

測定した変数

逸脱頻度 私語（授業と無関係の私語），内職，ゴミのポイ捨て，信号無視，という4つの行動の頻度について，「1. ぜんぜんしなかった～5. たくさんした」で回答を求めた。私語については，私語尺度（出口・吉田，2005）による測定も行った。

規範逸脱行動に対する態度 上の4つの各行動について，「自分も周囲も遵守（R）」「自分は遵守，周囲は逸脱（S）」「自分は逸脱，周囲は遵守（T）」「自分も周囲も逸脱（P）」という仮定の4状況を提示した。そして，「1. 非常に不満～7. とても満足」で回答を求めた（出口（2013）と同様）。

周囲にいる他者 「あなたの隣に座っている人」の質問紙に印刷された番号を記入するよう求めた。**調査対象者および手続き**

1つの中学校における12学級の生徒440名（男子217，女子218名，不明5名）から有効な回答を得た。質問紙は匿名式で，2学期に集団で行った。

結果と考察

規範逸脱行動に対する態度の分類

4つの状況に対する態度（R，S，T，P）を基に，逸脱行動ごとに，以下の5つの行動基準に回答者を分類した（出口（2013）と同様の方法）。1) 遵守（「R>T and S>P」「R=T and S>P」「R>T and S=P」），2) 逸脱（「R<T and S<P」「R=T and S<P」「R<T and S=P」），3) 同調（「R>T and S<P」），4) 反対（「R<T and S>P」），5) 中立（「R=T and S=P」）。「反対」は，その割合が非常に低かったため（0.2～0.9%），以後の分析からは除外した。

また，「周囲にいる他者」の態度も，上記と同様の方法で分類した。この際，最初に記入された者（回答欄左上に記入された番号）のデータを用いた。

自分の行動基準と逸脱頻度

行動基準を独立変数，逸脱頻度を従属変数とした一要因分散分析を行った（「私語」については，私語尺度による指標を分析の対象とした。以下も同様）。その結果，4つ全ての規範逸脱行動において，行動基準の有意な主効果が示された（ $p<.05$ ）。全般的に，逸脱>同調>遵守の順で，逸脱頻度が高い傾向が示された。

周囲にいる他者の行動基準と逸脱頻度

前と同様の方法で分散分析を行った。その結果，

「私語」「信号無視」において，行動基準の有意な主効果が示された（ $p<.05$ ）。「私語」については，周囲にいる他者の行動基準が「中立」である生徒の逸脱頻度が最も高かった。一方，「信号無視」については，「逸脱」の逸脱頻度が最も高かった。

学級の構成と学級全体の逸脱頻度

教室内の行動である「私語」「内職」について，学級ごとに，各行動基準を持った生徒の数，および「逸脱行動の頻度」の平均値を算出した。さらに，「遵守」の生徒数（全体の31%）から「逸脱」の生徒数（16%）を引いた値を求め，これらの値と「逸脱行動の頻度」間の相関係数を算出した（出口（2013）と同様）。

その結果，「私語」に関しては，「遵守の生徒数」（図1）および「遵守の生徒数と逸脱の生徒数の差」と逸脱頻度の間に，有意な負の相関（ $r_s=-.62, -.64$ ）が示された（ $p<.05$ ）。しかし，「逸脱の生徒数」に関しては，有意な相関は示されなかった。これらは，出口（2013）の結果を支持するものであった。なお，「同調」の割合（47%）は最も高かったが，学級全体の逸脱頻度との関連は示されなかった。一方，「内職」に関しては，いずれの指標の間にも有意な相関は示されなかった。「内職」は，「逸脱」の割合が最も高く（33%），「逸脱行動」と見なされていなかった可能性が考えられる。

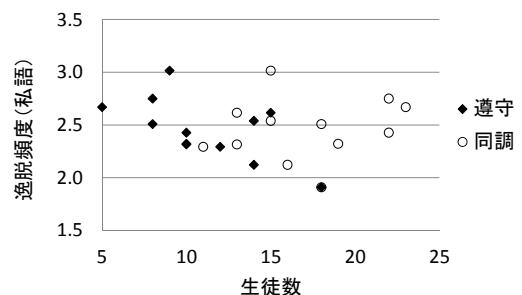


図1 学級内の生徒数と逸脱頻度の関連

引用文献

出口拓彦 (2013). 規範逸脱傾向のある生徒は学級内の逸脱行動を増加させるのか 日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 58.

出口拓彦・吉田俊和 (2005). 大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との関連：大学生活への適応という観点からの検討 社会心理学研究, 21, 160-169.

※本研究の一部は，JSPS 科研費（基盤研究C，課題番号26380885）の援助を受けた。